

## 研究ノート

## 新出『貝合對末之口傳』の解題と翻刻

吉海直人

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

## A Bibliographical Introduction to “Kaiawase Tsuimatsu no Kuden” in My Possession

Naoto Yoshikai

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

【要旨】百人一首かるたの並べ方を書いた新出資料として、『貝合對末之口傳』を紹介する。これは江戸時代に書写された口伝であるが、そこに百人一首かるたの並べ方と貝覆（貝合）の並べ方が図入りで解説されている。この通りに並べて遊ばれていたかどうかはわからないもの、かるた遊びに関する資料は少ないので、貴重な資料と思われる。そこで翻刻を紹介する次第である。

## 解題

【キーワード】かるた並べ方・ついまつ・貝合

百人一首かるたの並べ方の一資料として、新出『貝合對末之口傳』を紹介したい。これは近世後期以降の写で、「對末」と「貝合（貝覆）」の並べ方が図示された珍しいものである。「口伝」とある点、一般に流布していたものではなく、特定の人に秘伝として伝授されたものと思われる。なお「對末」は恐らく「続松」の当て字で、かるたの別称とされているものである。

そもそも百人一首かるたの並べ方に関しては、古来明確な決まりはなかった。江戸期の版本の挿絵などで紹介されているものは、大きく三つに分類される。一つは貝合（貝覆）型で、中心に上の句札（絵札）を重ねて置き、その周辺に同心円上に下の句札（取り札）を置くというものである。これは貝覆の遊び方を踏襲したものであるが、必然的にかかるたが貝覆から発展したというかるた成立の神話と結びついたものである。二つ目は長方形型で、縦横に隙間なく整然と下の句札を並べるやり方である。ただし同じく長方形といっても、何種類かの違いが存する。その一端はかつて紹介したことがある。<sup>1)</sup>三つ目はいわゆる散らし型で、雑然と下の句札を散らすものである。

その三種類の中で、本書は長方形になっているものの、中心に上の句を置くスペースが設けてあるので、貝合（貝覆）型と長方形型の折

裏型になっている。この形でかるた取りが行われたとは考えにくいので、これはあくまで紙面上の「口伝」であろう。

ここで本資料の簡単な書誌を記しておきたい。本資料は縦17・5 cm ×横49・5 cmの薄紙が三枚と縦17・5 cm ×横32・5 cmのやや短めの薄紙、計四枚が横に貼られたものである。それに縦17・5 cm ×横7・3 cmの楮紙の表紙が付けられて、簡単な卷子本の形態に仕立てられている。

表紙には「貝合對末之口傳」と外題が書かれ、また内題及び一丁目の裏書にも同様の書名がある。内題の下方には「高橋文庫」という印が押されているが、おそらく旧所蔵者の蔵書印であろう。

本書の内容は、「口伝」とするだけあって、従来のかかるたの遊び方には見られない記述も混じっており、その点にも資料的価値が認められる。

翻刻

貝合對末之口傳

(朱印) 高橋文庫

- 一 對末の下の句百枚圖のことくならへ置もの也 但四ツの隅は天子の御製ならへ申物也<sup>②</sup>
- 一 下に毛氈を鋪て八通り十三通りならへ申也<sup>③</sup> 中に上の句置所あけ置申事也
- 一 字頭いづれも下座也<sup>④</sup> 尤人数きわめなし
- 一 小女御側にて御合せし對末 浅みとりに入置申物也 下座の方の小女ハ御手遠なる所の下の句を御意にしたかひとり上申

役也

- 一 上の句かさ高なるゆへ百枚を三度程にわけて出し置物なり<sup>⑤</sup>

貝合對末之口傳



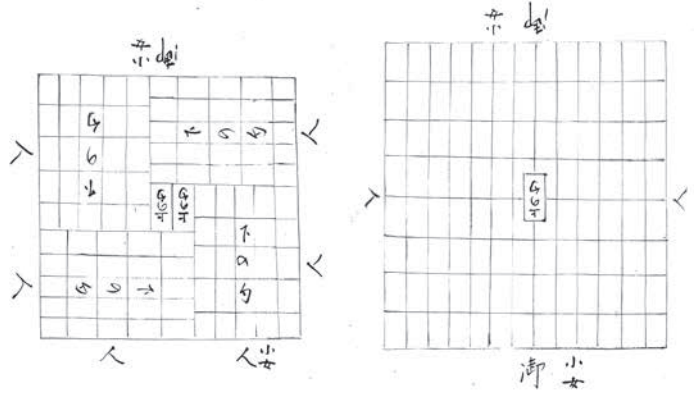
一 對末下の句百枚圖のことくならへ置もの也 但四ツの隅は天子の御製ならへ申物也

一 下に毛氈を鋪て八通り十三通りならへ申也 中に上の句置所あけ置申事也

一 字頭いづれも下座也 尤人数きわめなし

一 小女御側にて御合せし對末 浅みとりに入置申物也 下座の方の小女ハ御手遠なる所の下の句を御意にしたかひとり上申

- 一 對末の下の句百枚を図のことく順廻に廿五枚もならへ申事もありて中の明〔空〕たる所に上の句置へし尤上の句も字かしら下座にしておくなり<sup>⑦</sup>
- 一 すへて上の句はよみ終て片方は裏返して置なり<sup>⑧</sup>
- 一 御前にてならへ申時はかミの句を取出し置 扱下の句を出しいたき



- 一 凡貝合の事人数定なし 其内小女と有之所に御小姓着座なり 御側の小女は尤貝の御用等勤 下座の小女は御手遠なる所の貝を御意を受て合候てさし上申やくなり
- 一 貝ならへ申所ハ毛せんを敷て貝を置不申候へはかひすへり不定也
- 一 地貝三百六十図のことくならへ申也 中の所十二置夫より外は前に幾通りもならへ申候 但望に寄て中を四角にも三角にもたまこ形にもならへ出し申也<sup>⑩</sup>
- 一 貝元の役は出し貝を小蓋に成共入候て右の脇に置一ツツ、頭を御前へ向真中の所に差置申也 口傳
- 一 御側には小蓋の上に綾紗を鋪置申候 御相手には
- 一 銘々に小ふたを置申候 綾紗に及すならへ申貝を地貝もまき貝とも申 是雌

貝合之事

て百枚共にならへ終 上の句を又いたきて二ツにわけ中に置物なり 上の句二ツに分て置時片々は秋の田の歌上に置 片々は百敷の歌の上に置ものなり 下は順にかまわす入ませ置ものなり

- 一 貝なり<sup>①</sup>
- 一 出し貝と申は雄なり<sup>②</sup>
- 一 貝の内を上にしてならへ置申を繪合と申なり<sup>③</sup>



水嶋卜也  
之成  
伊藤甚右衛門  
幸氏  
同 隼太  
幸充

同 将曾

幸督

同 隼太

幸辰

(紙背)  
貝合對末之口傳

(注)

- (1) 吉海直人「歌がるたの記」の翻刻と解題「総合文化研究所紀要23・平成18年3月31日、同「女早学問」所収「百人一首」歌貝「絵貝」「歌牌」貝覆」の翻刻と解題」同志社女子大学大学院文学研究科紀要9・平成21年3月30日参照。
- (2) 「四ツの隅は天子の御製ならへ申物也」という解説は、従来の並べ方には認められないものである。天皇の御製を尊重したのであるが、百人一首には天皇の歌が8首あるので、この記述だけではどの天皇の歌を利用したのかまではわからない。
- (3) 「八通り十三通り」というのは、縦に8首・横に13首という意味であろう。そうなると計104首になるが、中央の上の句札置き場として4首分空白にすれば、ちょうど百首が長方形の中に収まることになる。
- (4) 「字頭」というのは和歌の冒頭の字のことである。これが「下座」に向いているということは、上座からは和歌の文字がそのまま読めることになる(下座からは逆さまになる)。
- (5) 「三度程にわけて出し置物なり」とは、上の句札を一度に重ねないで、山を三分の一程度に分けて、無くなったら補充するということであろう。
- (6) 「順廻に廿五枚もならへ申事もあり」とは、百枚を四等分し、各自縦5枚×横5枚の長方形をそれぞれ90度に接続するというものである。真ん中にできたスペースは、やはり上の句札置き場になっている。
- (7) 「上の句も字かしら下座にしておくなり」とあるのは、下の句札の上と同様で、身分の高い人が座る上座から歌が読みやすいように工夫されていることがわかる。

- (8) 「上の句はよみ終て片方は裏返して置なり」とは、詠み終えた上の句札は、中央に伏せて置く」ことになっていたらしい。
- (9) 「片々は秋の田の歌上に置片々は百敷の歌上に置ものなり」とは、中央の上の句置き場に二山に上の句を置くが、その一番上は天智天皇札と順徳院札を置く決まりになっているようである。
- (10) 貝覆の貝の並べ方は円状にするのが一般的だが、趣向によっては様々な形に置くこともできたようである。
- (11) 「ならへ申貝を地貝(と)もまき貝とも申。是雌貝なり」とはまず中央に置く「出し貝」とその周囲に並べる「地貝」に分けている。「地貝」は「撒貝」とも称するが、それは「雌貝」である。
- (12) 「出し貝と申は雄なり」とは、「地貝」を「雌」と称するのに対して、「出し貝」は「雄」と称する。この違いは図では貝の中央が左寄りか右寄りかで分けているが、本来は貝の付け根の接合部分の形で雄か雌かが決められている。
- (13) 「貝の内を上にしてならへ置申を繪合と申なり」とあるのは、非常に珍しい説明である。本来の遊びは貝を伏せるので、貝の内側(貝裏)はほとんど遊びとは無縁である。ただし貝を豪華に見せるため、あるいは即座に貝が一致するか否かを判別するために、貝裏には同じ図柄の絵が書かれている。それを遊びに用いれば、それは「繪合」になる。

\*本稿は二〇一四年度同志社女子大学研究助成金(個人研究)の成果の一部である。